

谷中輝雄はどのようにソーシャルワーカーとしての価値を形成したかⅡ —「生活のしづらさ」という考えの形成過程に焦点を当てた文献研究—

○早稲田大学人間科学研究科 大隅薫 (009296)

早稲田大学人間科学学術院 田中英樹 (02697)

キーワード：谷中輝雄 生活のしづらさ ストレngths視点

1. 研究目的

本研究の目的は、精神科ソーシャルワーカーの先人である谷中輝雄(1939～2012)が遺した文献をたどることにより、谷中のソーシャルワーカーとしての価値がどのように形成されたかを明らかにすることである。

谷中は、1970年に、精神障害のある人を支える事業である「やどかりの里」を埼玉に立ち上げた人物である。「やどかりの里」は、現在も精神障害のある人の相談支援、生活支援、労働支援、またセルフヘルプネットワークやクラブ活動などを行う場として機能している。谷中はこれらの活動を、施設外収容禁止条項のある精神衛生法時代から先駆的に行っていた。何故なら、当時谷中が勤めていた精神病院に入院する患者の「普通の生活がしたい」、「いこいの家が欲しい」という願いが谷中を動かしたからである。

この当事者の願いを引き出し、その願いを中心に環境を整備する谷中の姿勢は、現在のソーシャルワークにおける「当事者との協働」や「strengths視点」の価値と共通する。先行研究においても、やどかりの里の実践とstrengthsモデルとの親和性が確認されている(藤井達也 2004: 172, 江間由紀夫 2014: 48-49)。よって、本研究成果は、ソーシャルワーカーの主要な価値がどのように形成されるかを明らかにする上での一助となると考えられる。

2. 研究の視点および方法

谷中は、自らの実践から得た知見を数多くの文献に遺していった。特に、精神障害のある人が病者としてのみ捉えられていた当時の精神保健福祉動向の中で、精神障害のある人を生活者として見た「生活のしづらさ」という考えは、その後の精神保健福祉領域に大きな影響を与えていった。本研究では、この「生活のしづらさ」という考えの形成過程に焦点を当てた。研究方法は、文献研究により行った。対象文献は、1970年以降に谷中が関わった213の文献とした。分析方法は、対象文献より抽出された「生活のしづらさ」に言及した谷中の発言を時系列で整理することにより行った。

3. 倫理的配慮

本研究は、一般社団法人日本社会福祉学会の研究倫理指針を遵守して行った。

4. 研究結果

本研究の結果、以下3点が明らかになった。

① 「生活のしづらさ」という考えの変遷

「生活のしづらさ」という考えは、活動初期の1970年前半は「社会生活上の困難／弱点／とまどい」という言葉で語られ、1970年後半には「生活障害」、1980年前後に「生活のしづらさ」という言葉に変化を遂げている。1990年以降は、「生活のしづらさ」は「克服」する対象から、「補完・補強」する対象へ変化し、後に「生活の豊かさの追求」として「健康な部分を重要視する」という考えと合わせて語られている。また、谷中は「生活のしづらさ」という考えの形成過程を振り返る際、谷中の大学院における師であり「やどかりの里」の初代理事長である岩本正次の影響を複数の文献で明示している。また、活動の初期から共に「やどかりの里」を支えてきた荒田稔の気づきとして、「社会生活のとまどい」という考えを講演した記録も発見された。

② 「健康な部分を重要視する」という考えについて

1990年以降、「生活の豊かさの追求」として「生活のしづらさ」という考えと統合された「健康な部分な部分を重要視する」という考えは、谷中が活動初期より考察していた考えであった。この考えは、「やどかりの里」が財政の危機に見舞われた1970年半ばの一時期には語られなくなるが、1980年前後に行われた他の地域で同じ活動を行っている仲間との語り合い、また職親との関わりの振り返りの中で再び語られていった。

③ 一貫している要素

「生活のしづらさ」という考えについて、活動初期から晩年まで一貫して語られている要素は、「やどかりの里」のメンバーとの日常生活における共なる活動ということである。

5. 考察

本研究結果より、谷中の「生活のしづらさ」という考えは、徐々に「生活の豊かさの追求」として「健康な部分を重要視する」という考えと統合されていったことが明らかになった。谷中のこのソーシャルワーカーとしての価値は、3つの学びにより形成されたと考えることが出来る。第1に、「やどかりの里」内部の支援者仲間からの学びである。谷中は、当時専任で「やどかりの里」のメンバーと共に生活をしていた荒田や、師である岩本の言葉より示唆を受けて、「生活のしづらさ」の概念を形成したと考えられるからである。第2に、「やどかりの里」外部の支援者仲間からの学びである。谷中は、他の地域で同じ活動を行っている仲間や職親から良い実践を学ぶことにより、「健康な部分を重要視する」支援を再考したことが伺えるからである。そして第3に、「やどかりの里」のメンバーからの学びである。谷中は、活動初期から晩年まで一貫して「やどかりの里」のメンバーとの日常生活における共なる活動を重要視していたからである。また、これらの学びには、谷中の他者や他で行われている支援への興味や学びの姿勢も反映されていたと考えられる。

6. 参考文献(※谷中の文献は当日一覧表にして資料で配布する)

- 藤井達也 (2004) 『精神障害者生活支援研究 生活支援モデルにおける関係性の意義』学文社。
 江間由紀夫 (2014) 『『生活支援論』再考—谷中輝雄の遺したもの—』『東京成徳大学研究紀要—人文学部・応用心理学部—』21, 45-53.